

蓄藏貨幣論（二）

小林 威雄

本稿は、本誌第八卷第一号に掲載した「蓄藏貨幣論」のつづきである。

前稿においてのべたことは、『資本論』第一卷第一篇第三章第三節「貨幣」の冒頭の文章についての二三の問題、蓄藏貨幣の形態規定、単純な商品流通のもとにおける蓄藏貨幣などについての考察である。

本稿は、これにつづき「職業的な貨幣蓄藏者は、高利貸に転化するとき、はじめて重要となる」とマルクスがのべている文章の考察、そして資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の形成、その目的、役割、性格などについての考察、最後に信用制度を考慮に入れて、資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣について考察した。

五

前節において、われわれは、単純な商品流通の領域内における貨幣蓄藏を考察し、単純な商品流通のもとにおける

一般的な・支配的な形態としての蓄藏貨幣をあきらかにした。そこで、つぎに資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の形成、その目的、役割、性格などをあきらかにしなければならぬのであるが、その前に「資本制生産以前」に属しているが、単純な商品流通の視野外に属する職業的な貨幣蓄藏者の高利貸への転化にともなう問題を検討してみようと思う。

マルクスは職業的な貨幣蓄藏者の高利貸への転化の重要性についてつぎのごとく述べている。

「すでに見たように、貨幣とともに必然的に貨幣蓄藏があらわれる。しかし、職業的な貨幣蓄藏者は、高利貸に転化するとき、はじめて重要となる」¹⁾²⁾〔『資本論』第三卷、S. 641. 邦訳、青木書店版、長谷部訳、八三七ページ〕。

(1) 「だがこれは(この引用文をさす……引用者)『資本制以前』に属するが単純な流通の視野外に属する」(三宅義夫著『貨幣信用論研究』三七ページ)。

(2) 高利資本の存立条件は、商業資本の存立条件とおなじく「諸生産物の少くとも一部分がすでに商品に転化していること、および商品取引と同時に貨幣の相異なる諸機能が発展していること」〔『資本論』第三卷、S. 641. 邦訳、同上 八三七ページ〕のはかなんらの条件も必要としない。マルクスは、他のところでつぎのようにも述べている。

「商業資本は流通に押しこめられており、その機能はもっぱら商品交換の媒介にあるから、この資本の実存のためには、単純な商品 \parallel および貨幣流通に必要な諸条件以外には何らの条件も必要でない。あるいは、むしろ単純な商品 \parallel および貨幣流通が商業資本の実存条件である」〔『資本論』第三卷、S. 356. 邦訳、同上、四六一―二二ページ〕。

そこで、まず、ここでマルクスが「職業的な貨幣蓄藏者は、高利貸に転化するとき、はじめて重要となる」と指摘するとき、いかなる意味で職業的な貨幣蓄藏者が重要となるのか、という問題を考察してみよう。

第一に、職業的な貨幣蓄藏者が高利貸に転化することによって、貨幣蓄藏が、貨幣蓄藏者自身による、より多くの

商品の生産およびその販売によって貨幣を流通からひきあげるといふ形態においてでなく、「貨幣貸付による高利」といふ形態においておこなわれ、貨幣蓄蔵が「自己増殖的」なものとして現実化されるという意味において重要である。

前節においてみたごとく、貨幣蓄蔵者は、貨幣を蓄蔵するのに勤勉を積極的条件とし、節約、禁欲を消極的条件とし、もってこれらをかれの「主徳」として、より多くの商品を生産し、それを販売して貨幣をえ、他方では、より少く消費するということによって貨幣を流通からひきあげ蓄蔵したのであるが、職業的な貨幣蓄蔵者は、高利貸に転化することによって、もはや以前の「主徳」を必要とせず、ただ貪欲をもって貨幣を蓄蔵することができるようになる。すなわち、かれは、貨幣を高利でもって他人に貸付け、生産者たちのもつとも必要不可欠な生活維持手段をこえるすべての超過分を取得し、他人に勤勉、節約、禁欲を強要して貨幣を蓄蔵するのである。したがって、ここにおいてはじめて貨幣蓄蔵が「自己増殖的」なものとして現実化され、貨幣蓄蔵がおしすすめられて貨幣蓄蔵者の夢を実現するのである。⁴⁾

(3) 「資本制生産様式以前の時代における高利資本が実存する特徴的な形態は二とおりある。…その両形態とは、…第一には、浪費者の豪族・本質的には土地所有者への貨幣貸付による高利であり、第二には、自分自身の労働諸条件を所有している小生産者への貨幣貸付による高利である。この小生産者のうちには手工業者も含まれているが、全く独自のものとして農民が含まれている。ただし、総じて先資本制的状態のもとでは、小さな自立的な個別生産者が許容されるかぎりでは、農民階級がその大多数をなすはずだからである」(『資本論』第三卷、S. 622. 邦訳、同上八三八ページ)。

(4) 「貨幣蓄蔵は高利において初めて現実化され、その夢を実現する」(『資本論』第三卷、S. 625. 邦訳、同上八四四ページ)。

資本制生産様式のもとにおける利子生み資本と高利資本とは、それぞれが資本として機能する条件を異にし、また貨幣の貸

手に対応する借手の姿態を異にしているが、この資本そのものの本性においては区別されるころはない。(註(9)を参照) マルクスは、他のところで利子生み資本において貨幣蓄藏者の敬虔な願望が実現されるとのべているのを合せて引用しておく。「かくして利子生み貨幣資本において貨幣蓄藏者の敬虔な願望が実現したのである」(『資本論』第三卷、S. 489. 邦訳、同上五五九ページ)。

職業的な貨幣蓄藏者が高利貸に転化すると、蓄藏貨幣形態にある貨幣は、他人に貸付けられ、「自己増殖的」なものとなるのであるが、これは先資本制的なものであるとはいえ「資本」として機能しているということの意味⁵⁾している。

(5) 「高利は消費的富に対立するものであるが、それじしん資本の成立過程として、歴史的に重要である」(『資本論』第三卷、S. 645. 邦訳、同上八四三ページ)。

高利資本は、一方では「資本制生産以前」の諸生産様式にたいして、それらを変化させることはないが、顛覆的で破壊的な作用をおよぼし、他方では、その結果として爾余の資本制生産様式の諸条件が現存する場合には資本制生産様式の諸前提を形式するための有力な槓杆となる。

第二に、このような意味で重要である。

職業的な貨幣蓄藏者の手もとに蓄藏されていた蓄藏貨幣は、かれが高利貸に転化することによって他人に貸付けられ高利資本として機能する。高利資本は、直接的生産者のもつとも必要とする不可欠な生活維持手段をこえるすべての超過分を取得し、さらには、かれらの労働諸条件である土地や家屋などにたいする所有名儀を獲得して生産力を麻痺させ、「一面では、古代的(「ギリシャ・ローマ的」)および封建的富にたいし、また古代のおよび封建的所有にたいし」、他面では、「小農のおよび小市民的な生産——要するに、生産者がまだ自分の生産手段の所有者として現象す

るようなすべての形態」の生産にたいして顛覆的で破壊的な作用をおよぼす。この作用によって高利資本は、生産様式を吸いとり、貧困化させ、「ますます哀れな条件のもとで再生産の進行を余儀なくさせる」のである。しかしながら、高利資本は、生産様式を変化させることはない。生産様式に吸いつき、それを利用し、その寄生虫として、生産様式を悲惨なものにするのである（『資本論』第三卷、S. 632-6。邦訳、同上八三八-四三三ページ）。

(6) 「高利は商業と同じく、ある与えられた生産様式を利用するのであって、これを創造するのではなく、外部からこれに關係する。高利は与えられた生産様式を、たえずくりかえして利用しうるために直接に維持しようとし、保守的であり、これを一そう悲惨なものたらしめるにすぎない」（『資本論』第三卷、S. 653。邦訳、同上八六〇ページ）。

このように高利資本は、与えられた生産様式に寄生して、その生産力の発展を癱痺させ、悲惨なものたらしめるような顛覆的で破壊的な作用をおよぼすのであるが、この作用の結果として高利資本は、同時に他方では、資本制生産様式の爾余の諸条件が現存している場合には資本制生産様式の諸前提を形成するための有力な楨杆となる。すなわち、高利資本は、富裕な土地所有者を滅亡させ、また直接的生産者を吸収して大貨幣資本の形成および集積をもたらし、他面、直接的生産者からかれらの労働諸条件を収奪することに成功するかぎり資本制生産様式の諸前提を形成するための有力な楨杆となるのである。

(7) 「高利が、二重のことに——第一には、總じて商人身分のかたわらに自立的貨幣財産を形式することに、第二には、労働諸条件を取得すること、すなわち旧生産諸条件の所有者を破滅させることに——成功するかぎりには、高利は、産業資本の諸前提を形成するための有力な楨杆である」（『資本論』第三卷、S. 658。邦訳、同上八六一ページ）。

だが、前述のごとく高利資本は、生産様式を変化させるものではなく、与えられた生産様式に寄生し、それを利用するのであって、新しい生産様式を創造するものではない。

高利資本は、資本制生産様式の諸前提をもたらす作用をおよぼし、それに成功するかぎり諸前提を形成するための有力な槓杆となるのであるが、どの程度まで、大貨幣資本の形成および集積の過程、そして直接的生産者からの労働諸条件の収奪の過程が「旧生産様式を止揚するかは、またそれが旧生産様式の代りに資本制生産様式を生ぜしめるか否かは、まったく、歴史的発展段階、および、これによって与えられる諸事情に依存する」のである。(『資本論』第三卷、S. 642、邦訳、同上八三九ページ)。

(8) 「資本制生産様式の爾余の諸条件が現存する所と時において初めて、高利は、一方では封建領主と小生産との破滅により、他方では資本への労働諸条件の集中によって、新たな生産様式の形成手段の一つとして現象する」(『資本論』第三卷、S. 645、邦訳、同上八四二ページ)。

職業的な貨幣蓄積者が高利貸に転化するとき、貨幣蓄積者がいかなる意味で重要となるのか、ということについては大体以上の二点において重要であると考えられる。

そこで、つぎに、高利貸による貨幣蓄積について考察してみよう。

単純な商品流通のもとにおける素朴な貨幣蓄積者は、前述のごとく、みずからの勤労と消費の節約、禁欲によって貨幣蓄積をおこなうのであるが、それについて高利貸は、みずからの勤労、節約、禁欲によってではなく、他人にこれらを強要して、その剰余労働を吸取することによって貨幣蓄積をおこなう。高利資本は、「雙生児兄弟たる商人資本とともに、資本の大洪水前的形態」(『資本論』第三卷、S. 641、邦訳、同上八三七ページ)に属しているが、この資本の本性または性格においては、資本制生産様式のもとにおける利子生み資本と区別するものはない。⁹⁾したがって、高利貸は、「先資本制的」ではあるが「資本家」であるということができ、また高利貸の貨幣蓄積は「資本家

的」な貨幣蓄蔵であるということができよう。資本家は、マルクスのいうごとく「貨幣蓄蔵者とはことなり、かれの個人的労働や個人的非消費に比例して富裕になるのではなく、他人の労働力を吸取して労働者に人生のあらゆる快樂の禁欲を強要する程度に應じて富裕となるのである」(『資本論』第二卷、S. 623 邦訳、同上九二四ページ)。他人に労働を強要し、消費の節約、禁欲を強制して、その程度に應じて富裕になるという点においては、資本家と高利貸とはなんらことなるところがない。この意味において高利貸もまた資本家とともに「合理的な貨幣蓄蔵者」(『資本論』第一卷、S. 160. 邦訳、同上二九三ページ)であるといえよう。したがって、素朴な貨幣蓄蔵者による貨幣蓄蔵と高利貸による貨幣蓄蔵——貨幣蓄蔵そのものの過程についてはおなじであるが——とは本質的にことなっているのである。¹⁰⁾

(9) 「利子生み資本——資本制生産様式の本質的な一要素をなすかぎりでの——を高利資本から区別するものは、けっして、この資本そのものの本性または性格ではない。そのもとでこの資本が機能する条件が変化し、したがってまた、貨幣の貸手に対応する借手の姿態がすっかり変化しただけである」(『資本論』第三卷、S. 636. 邦訳、同上八四七ページ)。

(10) 「この高利貸付資本による貨幣退蔵は、所謂『洪水前期的資本形態』即ち『資本前期的形態』に属するとはいえず、その本質において『資本家的』であつて、他人の剰余労働の収奪にその根拠を有つており、従つて貨幣退蔵者自身の勤労と私的消費の節約とによつて比例的に増大する貨幣退蔵者とは本質的に異なる」(友岡久雄著『貨幣・資本・信用』一一五ページ)。

貨幣蓄蔵者は、貨幣を流通からひきあげて蓄蔵し、蓄蔵貨幣を自己目的として貨幣を蓄蔵するのであるが、高利貸は、貨幣を高利でもつて他人に貸付けることによつて貨幣を蓄蔵する。したがって、高利貸は手もとに所持している蓄蔵貨幣を高利資本として貸付けなければならぬ。他人に貸付けられた貨幣は、蓄蔵貨幣の形態をぬぎすてて流通に入り、流通手段または支払手段として機能することになる。高利貸は、つまり蓄蔵貨幣の形態にある貨幣をたえず

流通手段または支払手段としての機能に転化させることによって貨幣を蓄蔵するのである。

高利貸の手もとにとどまっている蓄蔵貨幣は、それは「先資本制的なもの」ではあるが、一時遊休している「資本」の形態をとっているということができよう。

六

さて、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣の形成、およびその目的、役割、性格などについての考察に移ろう。

資本家は、貨幣蓄蔵者とはことなりみずからの労働、節約、禁欲によってでなく、労働者にこれらを強要し、その強要の程度に応じて富裕になる。致富運動という点においては、資本家も貨幣蓄蔵者もことなるところはないのであるが、貨幣蓄蔵者の場合は「個人的狂望」として現象し、資本家の場合は「社会的機構」の作用として現象する(『資本論』第一巻、S. 621. 邦訳、同上九二二―二二ページ)。

貨幣蓄蔵者は、より多く商品を生産し、それを販売し、そして消費を最小限にして貨幣をより多く流通からひきあげることによって富裕となるのにたいし、資本家は、「社会的機構」の一個の動輪として貨幣蓄蔵者のまさに逆の方法によって、すなわち貨幣をたえず流通に繰返し投じて価値の不断の増殖を達成することによって富裕となるのである。したがって、貨幣蓄蔵者のごとく貨幣を流通からひきあげて蓄蔵することを自己目的として貨幣を蓄蔵する、ということとは、資本家にとっては全く考えられないことである。資本として機能しないで遊休している貨幣は、資本家にとっては死蔵にすぎない。資本家は、一時でも貨幣を遊ばせておかず、これを資本として機能せしめ価値増殖を達

成しようとする。だから、ここでは寝ている蓄蔵貨幣は「遊休の富」となる。資本家は、貨幣蓄蔵者が禁欲精進しているのを見て「それは、かれらの偏見だ」と嘲笑する（『資本論』第一巻、S. 623 邦訳、同上九二四ページ）。マルクスは、貨幣蓄蔵者を「気のちがった資本家」といい、資本家は「合理的な貨幣蓄蔵者」であるといっている。¹²⁾

(11) 「蓄蔵貨幣としての蓄蔵貨幣は、ここでは（ブルジョアの生産の発達した段階では——引用者）たんなる遊休の富となる」（『経済学批判』S. 147. マルクス・エンゲルス選集補巻（3）大月書店版、一七五ページ）。

「この剰余生産物は……その蛹化した貨幣においては、すなわち蓄蔵貨幣したがって単にだんだんと形成されつつある潜在的貨幣資本としては、絶対的に不生産的であり、この形態では生産過程に並行して、しかも生産過程の外部に、横たわる。それは資本制の生産の死重^{トッド・ウェイト}である」（『資本論』第二巻、S. 504 邦訳、同上六五五ページ）。

(12) 「この絶対的致富運動、この熱情的な価値追求は、資本家と貨幣蓄蔵者と共に共通なのであるが、しかし、貨幣蓄蔵者は気のちがった資本家にすぎぬのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者である。貨幣蓄蔵者が、貨幣を流通から救おうとすることによって得ようと努力する価値の休まない増加を、より賢明な資本家は、貨幣をたえず繰返し流通に委ねることによって達成するのである」（『資本論』第一巻、S. 160～1 邦訳、同上二九三ページ）。

資本家にとっては、このように流通しない貨幣の形態、流通を中断され、流通からひきあげられた蓄蔵貨幣は、遊休の富、死蔵として忌諱されるのであるが、それにもかかわらず、資本家は一定の蓄蔵貨幣をもっていなければならぬのである。すなわち、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣は、「総生産機構の従属的な一機能として」（『経済学批判』S. 128 邦訳、同上二五四ページ）あらわれるのである。したがって、それは、単純な商品流通のもとにおける自己目的としての、富としての富の蓄蔵、「自立的な致富形態」としての蓄蔵貨幣ではない。¹³⁾

(13) 「富としての富の蓄積がおこなわれるのは、実際たゞ簡単な流通の領域内だけのことであり、しかも貨幣蓄蔵の形態でだけである」（『経済学批判』S. 126 邦訳、同上二五一ページ）。

「致富の意味をもつところの抽象的形態における貨幣蓄藏は、ブルジョアの生産の発展とともに減少する」(『経済学批判』S. 142. 邦訳、同上170ページ)。

「自立的な致富形態としての貨幣蓄藏は、市民的社会の進展につれて消失する」(『資本論』第一巻、S. 148. 邦訳、同上176ページ)。

「蓄藏貨幣は、流通していない貨幣の形態、流通を中断され、したがって貨幣形態で貯えられる貨幣の形態、に他ならない。貨幣蓄藏そのものの過程については、これはすべての商品生産に共通であって、これが自己目的としての役割を演ずるのは、未発展な先資本制商品生産形態のもとですぎない」(『資本論』第二巻、S. 79. 邦訳、同上110ページ)。

「資本制生産の基礎では、貨幣蓄藏としての貨幣蓄藏は目的ではない」(『資本論』第二巻、S. 350. 邦訳、同上四五ページ)。

資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣は、前述のごとく、「総生産機構の従属的な一機能として」あらわれるのであるが、マルクスは、資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣をつぎのごとく二つの形態においてのべている。

「資本制生産過程ならびに商業一般——先資本制的生産様式のもとでさえもの——から、つぎのものが生ずる。

第一に、蓄藏貨幣としての貨幣の集積、すなわち、今日では資本のうち常に貨幣形態で現存せねばならぬ部分の、支払および購買手段の準備金としての集積。これは蓄藏貨幣の第一形態であって、資本制生産様式のもとで再現し、また総じて商業資本が発展すれば少くとも商業資本のために形成される。いずれも、国内的流通にも国際的流通にも妥当する。この蓄藏貨幣はたえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰ってくる。つぎに蓄藏貨幣の第二形態は、貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態であって、新たに蓄積された未投下貨幣資本もこれに属する」(『資本論』第三巻、S. 350. 邦訳、同上四五三ページ)。

そこで、まず、資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の第一形態から入ろう。

資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣の第一形態は、資本の回転上つねに貨幣形態で現存していなければならない資本の部分の購買手段および支払手段としての準備金である。

この第一形態の蓄蔵貨幣は、資本制生産の以前においても「総じて商業資本が発展すれば少くとも商業資本のために」形成されていたものである。したがって、それは資本制生産のもとにおいて再現するといわれるのである。

マルクスは、『資本論』の第一巻第一篇第三章第三節「貨幣」において、また『経済学批判』第三章の三「貨幣」において、すでにこの第一形態の蓄蔵貨幣を単純な商品流通のもとにおける「自立的な致富形態」としての蓄蔵貨幣に對比してのべている。¹⁴⁾

(14) 「支払手段の準備金の形態での貨幣蓄蔵は、市民的社会の進展につれて増大する」(『資本論』第一巻、S. 148. 邦訳、同上二七六ページ)。なお『経済学批判』では、S. 142. 邦訳、同上二七〇ページの注にS. 148.

この第一形態の蓄蔵貨幣の特徴は、それがたえず流通に流れこんで購買手段あるいは支払手段として機能し、また、たえず流通からひきあげられ、たえず流動しているという点にある。

のちにものべるが、貨幣取扱業、銀行の発展によって、この第一形態の蓄蔵貨幣、そしてつぎにのべる第二形態の蓄蔵貨幣は、ともに貨幣取扱業、銀行に集中されるようになるが、この第一形態の蓄蔵貨幣の純技術的操作である収納、支払、簿記および保管などが貨幣取扱業、銀行によって代行される。このことによって、この蓄蔵貨幣の量は産業資本家や商業資本家が個々別々に管理している場合よりも縮小される。¹⁵⁾

(15) 「貨幣取扱業は、蓄蔵貨幣を形成するのではなく、この貨幣蓄蔵を——これが自由意志的である(つまり失業資本または再生産過程の擾乱の表現でない)かぎりにおいて——経済的最小限に縮小するための技術的手段を提供する。ただし、購買」

および支払手段のための準備金は、全資本家階級のために管理される場合には、各資本家によって別々に管理される場合ほど大きいことを要しないからである」(『資本論』第三卷、S. 332. 邦訳、同上四五六ページ)。

「ブルジョアの生産が発達している国では、銀行という貯水池に大量的に集積される蓄藏貨幣が、その独自の諸機能に必要とされる最小限に制限される」(『資本論』第一卷、S. 151. 邦訳、同上二八一—二二ページ)。

資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の第二形態は、産業資本、商業資本の回転において種々の原因から形成される貨幣形態で一時的に遊休する資本の形態である。この第二形態に属する蓄藏貨幣の形成を考察してみよう。

第一に、剰余価値の蓄積において形成される。資本は、価値増殖の運動体であつて、それは剰余価値を生産することによって自己を貫徹するものである。資本家は、貨幣に実現された剰余価値の一部をかれら自身の所得として生活のために消費するが、他の一部は事業の拡張または他の事業のために蓄積する。したがつて、剰余価値の蓄積は、それを生み出すところの資本の循環的価値増殖の反復によってなされる。そしてこの蓄積は、資本として能動的に機能するのに必要な最小限の大きさに、すなわち、旧事業の拡張または副業の開始に必要とされる最小限の大きさに達するまで引続いておこなわれる。剰余価値が資本として機能するようになれば、そこにはまた新しい剰余価値の蓄積がはじまる。

蓄積の過程にある剰余価値は、それが資本として機能することができる最小限の大きさに達するまでの間は貨幣形態でとどまつている。それは蓄藏貨幣の形態において実存するのである。したがつて、この蓄積の過程にある剰余価値は、資本として機能せず、だから価値増殖過程に参加せず、その外部に存在している貨幣額にすぎない。このように剰余価値の蓄積という形態における蓄藏貨幣は、資本の蓄積過程に含まれ、この過程にともなつて形成されるのである。そして、それはまた同時に本質的には、この資本の蓄積過程から区別され、その外部に存在する貨幣で

ある。¹⁶⁾

(16) 「ここでは、貨幣蓄蔵は資本制的蓄積過程に含まれる・この過程にともなう・だが同時に本質的にはこの過程から区別される一契機として現象する」(『資本論』第二巻、S. 74. 邦訳、同上103ページ)。

蓄蔵貨幣は、前にもみたごとく補足的な購買をとまなわなない一方的な商品販売を条件として流通から貨幣をひきあげることによって形成されるのであるが、この剰余価値の蓄積という形態における蓄蔵貨幣も、根本的にはこれとおなじである。しかし、この場合の蓄蔵貨幣は、それが自己目的としての役割を演ずるものではなく、資本の蓄積過程にともなうて形成され、追加的な潜在的貨幣資本としての役割を演ずるのである。¹⁷⁾

(17) 「たとえば、資本家Aが一年間または多年間にわたり、かれが継起的に生産しただけの商品生産物を売るならば、それによつてかれは、商品生産物のうち剰余価値の担い手たる部分——剰余生産物——をも、つまりかれが商品形態で生産した剰余価値そのものをも、継起的に貨幣に転形してつきつきに積立てるのであり、かくして潜在的な新貨幣資本が形成される。ここに潜在的というのは、生産資本の諸要素に転態されるべき、その能力および使命のゆえにである。だが事実ははかれは單純な貨幣蓄蔵を行うだけであつて、これは現実的再生産の要素ではない」(『資本論』第二巻、S. 496. 邦訳、同上六四四—五ページ)。

「この剰余生産物の継起的販売によつて、かれらは蓄蔵貨幣、すなわち追加的な潜勢的貨幣資本を形成する」(『資本論』第二巻、S. 502. 邦訳、同上六五三ページ)。

剰余価値の蓄積という形態における貨幣蓄蔵は、現実に資本として機能するための、すなわち「資本への剰余価値の転形のための資本循環の外部でおこなわれる機能的に規定された」(『資本論』第二巻、S. 8. 邦訳、同上111ページ)準備段階なのであつて、資本の蓄積に一時的にともなう過程として現象するのである。だからこの剰余価値の蓄積によつて形成される蓄蔵貨幣は、このような規定によつて潜在的貨幣資本なのである。

貨幣に実現された剰余価値は、このように資本蓄積にともなう一時的過程として、その一部分が蓄蔵貨幣形態で積

立てられるのであるが、この蓄積が同時に全資本家階級に生ずるといふことは、貴金属が追加され、それが全資本家階級に分配されるということを別にすれば考えることができない。一方に剰余価値の蓄積、すなわち、かかる規定にもとづく貨幣蓄積がおこなわれるならば、同時に他方で蓄積された剰余価値——蓄藏貨幣——が資本に転形され現実資本として機能する。したがって、蓄藏貨幣は、その形態をぬぎすてて購買手段、または支払手段として機能するのである。この貨幣蓄積は、このように追加された「貴金属的富」を内蔵せず、これまで流通している貨幣が機能変化をするということの内蔵しているのである。今まで流通手段として機能していた貨幣が、資本蓄積のために流通からひきあげられて蓄藏貨幣に転化し、それが前述のごとく潜在的な追加的貨幣資本として機能するのである。

だから「追加的貨幣資本の形成と一國にある貴金属の分量とは、因果的な相互關係に立つものではない」(『資本論』第二卷、S. 503、邦訳、同上六五四—五〇七)。

第二に、資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の第二形態は、固定資本の減価銷却基金の積立において形成される。生産過程において固定設備の形態をとる固定資本は、それが労働手段としては、つねに同一の使用価値物として、かつ一体となつてその全部が労働過程に入りこむが、価値形成の過程における価値としては、部分的にのみ入りこむ¹⁸⁾。

(18) 「生産手段に投下された資本価値の一部分に固定資本の性格をあたえる規定は、もつぱらこの価値が流通する独自の様式のうちにある。この独自の流通様式は労働手段がその価値を生産物に交付する——または価値形成者として生産過程中でふるまう——独自の様式から生ずる。そしてこの後者そのものはまた、労働過程における労働手段の機能の特殊的方式から生ずる」(『資本論』第二卷、S. 153—4、邦訳、同上二〇五—二〇六ページ)。

このような固定資本の独自性によって、固定資本については、その磨損に応じ、その価値を出発点に還流させる減価償却ということがおこなわれるのである。

すなわち、固定資本は、その全価値量を流動資本のごとく一挙に生産される商品に転化しないで、何年かにわたって継続的に一定の価値量だけを生産される商品に転化するというその独自性から、現実には機能している固定資本の更新にさいしての準備として、商品に転化する一定の価値量が減価として積立てられるのである。これが固定資本減価償却基金であるが、この償却基金は、流通からひきあげられた貨幣、すなわち蓄蔵貨幣形態において実存する。したがって、この形態の蓄蔵貨幣は、固定資本が、その価値の一部分を生産される商品に移転し、その商品が実現されることとなって形成される。

固定資本の更新にさいしては、固定資本減価償却基金として積立てられた蓄蔵貨幣は、一挙に流通に投ぜられて流通手段に転化する。だがこの固定資本の更新をおこなった資本家、すなわち、償却基金としての蓄蔵貨幣によって新しい固定設備を購入するためにこれを流通手段に転化した資本家、この資本家の手もとにおいて、ふたたび新しい固定設備のつぎの更新にさいしての準備として償却基金が積立てられ、この形態のもとにおける蓄蔵貨幣が形成される。このように減価償却基金は、固定資本の独自性によって回避することのできない必然的なものである。そしてそれは蓄蔵貨幣において実存するのである。

この形態における貨幣蓄蔵は、固定資本の全部が磨損してしまうまで続けられ、現実の資本としての機能に参加せず、したがって、その蓄蔵貨幣は、潜在的な貨幣資本として現象する。

第三に、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣の第二形態は、産業資本の流通期間中生産を連続するために必要とさ

れる追加資本の形態において形成される。

産業資本は、生産期間と流通期間の不断の周期的回転運動をおこなっている。この不断の周期的回転を通じて、はじめて前貸された価値額を維持するばかりでなく、剰余価値を生産して価値増殖がおこなわれるのであるが、この回転にさいして流通期間によって生産期間が中断されるのをふせぎ、生産を連続させていくためには、一定額の追加資本を準備していなければならない。この追加資本の総資本にたいする割合は、流通期間の回転期間にたいする割合にひとしく、この比率によって追加資本の大きさがきめられる。¹⁹⁾

(19) 「流通期間中の生産の連続性を達成するに必要な追加資本を決定するのは、一年間の流通期間の総範囲または合計ではなく、回転期間にたいする流通期間の比率に他ならない」(『資本論』第二巻、S. 260. 邦訳、同上三三八ページ)。

追加資本は、このように産業資本の不断の回転循環のために、必然的に流通期間の回転期間にたいする割合に応じて準備されるが、本源的資本が生産期間にある間は、相当部分一定期間にわたって遊休していなければならない。

追加資本も本源的資本と同様に生産手段と労働力に分割される。だが、追加資本がそれ自身の労働期間のために自由に処分されるものであるためには、それは、少くとも部分的には本源的資本の生産期間中において投せられて「不変的流動資本」に転形される。追加資本がどの程度までこの「不変的流動資本」の形態にあるか、またはこの転形が必要とされる瞬間までに追加資本はどの程度まで貨幣資本の形態にとどまるかは、事業の特殊な生産条件や地方的事情やあるいは原料などの価格の動揺に依存している。しかし社会的総資本についてみれば、つねに追加資本の多かれ少かれ相当部分が長期間にわたって貨幣資本の形態にとどまっている。

他方、追加資本の賃銀に投下されるべき部分は、労働力への転形によって生産資本の機能をはじめるまで貨幣資本

の形態で現存する。

このように追加資本の相当部分は、本源的資本が生産期間にある間、現実の資本の回転運動の外部にあり、流通からひきあげられた貨幣形態すなわち蓄蔵貨幣の形態において現存しているのである。

この形態の蓄蔵貨幣は、それが産業資本の不断の周期的運動、生産の連続性を保持するために準備されている貨幣資本であるという点に特徴がある。したがって、かかる形態の蓄蔵貨幣は、それが追加資本であるということに制約されているのである。

最後に、原料などの価格の下落、商品取引の中断など流通の停滞の結果として生ずる貨幣資本の特殊の形態についてふれておこう。この貨幣資本の特殊の形態は、流通の停滞から生ずるものであって、資本の回転運動から必然的に形成されるものではないが、それは一時的に遊休している貨幣資本であって、蓄蔵貨幣の形態において実存する。したがって、この形態も蓄蔵貨幣の第二形態に属するものであると考えられる。

産業資本に投下された資本が、たとえば、生産要素である原料などが価格下落をみたならば、これによって資本の一部が遊離される。そしてこの産業資本家が、この遊離された資本を直接に自分の再生産過程の拡張に用いないならば、かれの貨幣資本の一部分は過剰資本として循環から押出されて、遊休貨幣資本に転形される。この過剰資本となつた貨幣資本は、蓄蔵貨幣の形態をとるのである。

また商業資本において取引の中断が生ずるとき、この取引の中断の結果、新しい取引系列が後日でなければ開始されないような場合には、実現された貨幣は、一時的に過剰資本となり蓄蔵貨幣を形成する。²⁰⁾

(20) 「貨幣資本の蓄積の特殊の形態をあげねばならぬ。たとえば、生産要素たる原料などの価格下落によって資本が遊離され

る。産業家が直接に自分の再生産過程を拡張しえないならば、かれの貨幣資本の一部分は、過剰分として循環から押出されて、貸付可能な貨幣資本に転形される。ところが第二に、貨幣形態での資本が遊離される、——殊に商人のばあいには、取引の中断が生ずるときに。商人が一連の取引を片づけたならば、そして、かかる中断の結果として新たな取引系列は後日でなければ開始されないとすれば、実現された貨幣は、かれにとつては、蓄藏貨幣すなわち過剰資本を代表するにすぎない。だが同時に、この貨幣は直接に貸付可能な貨幣資本の蓄積を表示する」(『資本論』第三卷、S. 551. 邦訳、同上七一五—六ページ)。

なお、資本の回転上の原因からではないが、考えることのできる蓄藏貨幣の形成は、あらゆる階級の所得の中で貯えられ、貨幣部分である。所得の用途は、その相当部分は生活のために用いられるのであるが、一部分貯蓄をするということも考えうることである。この貨幣部分は蓄藏貨幣に転形される。そしてこの蓄藏貨幣は、所得者の購買手段または支払手段の準備金、あるいは臨時的経費のための準備金として機能し、かかる役割をもっている。

以上、資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣を考察したのであるが、それは要するに、資本の回転における種々の原因から形成される蓄藏貨幣なのである。

つぎに、単純な商品流通のもとにおける蓄藏貨幣と資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣とを比較検討してみよう。

蓄藏貨幣の形態は、流通からひきあげられた貨幣、流通しない貨幣、つまり流通を中断され貨幣形態で貯えられている貨幣の形態である。だから、貨幣蓄藏そのものの過程、いいかえれば蓄藏貨幣の形成そのものの過程については、すべての商品生産に共通である。²¹⁾

(21) 「蓄藏貨幣の形態は、流通しない貨幣、流通を中断され、したがって貨幣形態で貯えられる貨幣の形態に他ならない。貨幣蓄藏そのものの過程については、これはすべての商品生産に共通である」(『資本論』第二卷、S. 79. 邦訳、同上二一〇ページ)。

ところで、貨幣蓄藏が自己目的としての役割を演じ、そして蓄藏貨幣が「自立的な致富形態」として現象するの

は、未発展な先資本制生産のもとにおいて支配的である。すなわち、単純な商品流通のもとにおいては、「自立的な致富形態」としての蓄蔵貨幣が、一般的であり支配的な形態であるのである。だが、資本制生産のもとにおいては、この「自立的な致富形態」としての蓄蔵貨幣は減少し、従属的なものとなる。この「自立的な致富形態」としての貨幣蓄蔵が資本制生産のもとにおいてもおこなわれるのは、激変期においてにすぎない。²²⁾

(22) 「社会的質料変換が震撼させられるときには、発展したブルジョア社会においてさえも、蓄蔵貨幣としての貨幣の埋蔵がおこなわれる」〔『経済学批判』S. 124~5. 邦訳、同上149ページ〕。

単純な商品流通のもとにおける「自立的な致富形態」としての蓄蔵貨幣にたいして資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣は、その第一形態としては、資本のうちつねに貨幣形態で現存しなければならない部分の、購買手段および支払手段の準備金であり、その第二形態としては、資本の回転における種々の原因から形成される貨幣形態で一時的に遊休する資本である。それは、けっして「自立的な致富形態」の意味における蓄蔵貨幣の形成を目的としたものではない。前述のごとく、それぞれの目的と役割をもって形成されてくる蓄蔵貨幣である。単純な商品流通のもとにおける蓄蔵貨幣と資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣とは、その性格において本質的にことなっているのである。

単純な商品流通のもとにおける蓄蔵貨幣と資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣とは、このように本質的にことなっているのであるが、他の相異点をあげるとつぎのようである。

蓄蔵貨幣の形成、すなわち貨幣蓄蔵が、貨幣蓄蔵者の場合と資本家との場合とは全くことなっている。すなわち、幾度かのべたごとく貨幣蓄蔵者は、自分自身の労働、勤勉、節約などによってより多く商品を生産し、購買をとまわなない一方的な販売の反復によって貨幣を流通からひきあげ蓄蔵するが、資本家は、労働者に労働をさせ、労働者に

人生のあらゆる快樂の禁欲を強要し、勤勉と節約を強要して、商品を生産させ、その商品を販売することによって剰余価値を獲得して貨幣の蓄藏をおこなうのである。資本家は、貪欲のみをもって剰余価値をできるかぎり大きくするためのあらゆる努力をかたむけるのである。

第二の相異点は、蓄藏貨幣の分布の状態にある。単純な商品流通、すなわち、未発展の生産段階のもとにおいては、蓄藏貨幣は無限に分散している。これにたいし資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣は、資本制生産と並行して発展する銀行のもとに集中されている。

第三の相異点は、蓄藏貨幣の量的相異である。単純な商品流通のもとにおける蓄藏貨幣は、「自立的な致富形慮」としての蓄藏貨幣が支配的であるため貨幣蓄藏者によって無限の貨幣蓄藏が要求されている。これにたいする資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣は、前述のごとく資本の一次的に遊休している貨幣、あるいは資本の回転上貨幣形態で現存していなければならない購買手段および支払手段の準備金であり、また資本制生産のもとにおいては、資本として機能しない貨幣——蓄藏貨幣——は死蔵にすぎないのであるから、資本家は、蓄藏貨幣を経済的な必要の最小限にとどめようとつとめる。貨幣取扱業さらに銀行の発展によって資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣は、経済的必要の最小限に縮小されるのである。

七

前節においては、信用制度を度外視して資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の二つの形態を考察し、あわせて単純

な商品流通のもとにおける蓄藏貨幣とそれとの比較検討をおこなったのであるが、本節においては、資本制生産の発展とともに形成され発達する信用制度を考えあわせて資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣を考察してみようと思う。

信用制度は、まず「支払手段としての貨幣の機能、したがって商品生産者と商品取扱者との間での債権者・債務者の関係」を「自然的な基礎」(『資本論』第三卷、S. 436. 邦訳、同上五六八ページ)とし、貨幣取扱業の発展、そしてこの貨幣取扱業と結びついて「利子生み資本または貨幣資本の管理」が貨幣取扱業者の「特殊的機能として」(『資本論』第三卷、S. 439. 邦訳、同上五七一ページ)発展するということを要因として形成される。(講座「信用理論体系」I(第一章「概説—信用理論の体系」三宅義夫教授)二八ページ以下参照)。

貨幣取扱業は、「貨幣そのものの種々の規定性から、および貨幣の諸機能——したがって資本も貨幣資本の形態をとれば遂行せねばならぬ諸機能——」(『資本論』第三卷、S. 328. 邦訳、同上四五〇ページ)から生ずる貨幣の純技術的な諸操作を自己の独特の特殊の事業として独立化することによって生ずる。以下、貨幣取扱業を蓄藏貨幣との関連において考察する。

資本制生産のもとにおいて形成される蓄藏貨幣についての考察は前節においてみたところであるが、その第一形態としての蓄藏貨幣、すなわち、購買手段および支払手段の準備金は、たえず流通に流れこみ、またたえず流通から流れ出てきて流動的なものであるので、とくに収納、支払、簿記などの技術的な諸操作が必要であり、一時的に貨幣形態において遊休している資本の形態としての蓄藏貨幣の第二形態は、比較的長く滞留するので、とくに保管——もちろん収納、支払、簿記などの諸操作も必要であるが——という技術的な操作が必要である。

このような蓄藏貨幣にともなう収納、支払、保管、簿記などの純技術的な諸操作を貨幣取扱業者は産業資本家や商

業資本家にかわって代行する。

ところで、貨幣取扱業者が、産業資本家や商業資本家にかわってこのような貨幣の純技術的な諸操作を代行するた
めには、産業資本家や商業資本家の手もとにある蓄藏貨幣が、貨幣取扱業者の手もとに移されねばならない。したが
って、今まで産業資本家や商業資本家の手もとにあった蓄藏貨幣は、貨幣取扱業者の手もとに集中される。そこで、
貨幣取扱業者は蓄藏貨幣の集中の機関となるのである。

集中の機関としての貨幣取扱業への蓄藏貨幣の集中によって貨幣取扱業は、さらに同時にまた貨幣蓄藏を経済的最
小限に縮小するための技術的手段を提供する。(註(15)を参照)

このように、貨幣取扱業は、蓄藏貨幣の集中の機関であるにすぎず蓄藏貨幣を形成するものではない。そしてまた
集中される蓄藏貨幣は、それにもなう純技術的な諸操作を産業資本家や商業資本家にかわって貨幣取扱業者が代行
するために集められたものであるから、貨幣取扱業者において自由に活用することはできない。したがって、貨幣取
扱業者のもとに集中された蓄藏貨幣は、そのまま蓄藏貨幣の形態において存在していなければならない。もちろん産
業資本家や商業資本家の要求によって流通に流れこみ、流通手段または支払手段として機能する部分があり、他方、
流通からひきあげられてくる貨幣があるので貨幣取扱業者の手もとに存在している蓄藏貨幣の大半は、たえず変動
しているが。²³⁾

(23) マルクスは、「信用制度の他の側面は貨幣取扱業の発展に結びつくのであるが……」という文章のつぎに「すでに前篇
(第十九章)で見たように、事業家たちの準備金の保管、貨幣の収支や国際的支払の技術的諸操作、したがってまた地金の取
扱は、貨幣取扱業者の手もとに集積する」(『資本論』第三卷、S. 439. 邦訳、同上五七一ページ)とのべている。ここで「事

業家たちの準備金」といつているのは、産業資本家や商業資本家たちの購買手段および支払手段の準備金と解され、蓄蔵貨幣の第一形態に属するものである。したがって、ここでは購買手段および支払手段の準備金が、貨幣取扱業者の手もとに集積するということだけがのべられているにすぎず、蓄蔵貨幣の第二形態についてはふれていない。だが、蓄蔵貨幣の第二形態もまた貨幣取扱業者の手もとに集積することはあきらかである。

なお、マルクスがここで蓄蔵貨幣の第二形態についてのべていない理由を三宅教授は、つぎのごとくのべられている。

「かかる、貨幣形態で充用を待っている就業していない資本（蓄蔵貨幣の第二形態——引用者）の保管もまた、貨幣取扱業者の手によって行われることになるが、これを、マルクスは右のようにここに挙げていない。そのわけは、かかる貨幣資本の保管——これを貨幣取扱業者は貨幣取扱業者たる資格においては、たんに保管するにとどまるが——は、つぎの利子生み資本としての管理にすぐ結びついているということによるのであろう」（講座『信用理論体系』I「第一章「概説——信用理論の体系」三宅義夫教授」三五ページ）。

貨幣取扱業者は、前述のごとく貨幣の純技術的な諸操作を産業資本家や商業資本家にかわって代行するにすぎない。もし貨幣取扱業者が特殊な事業として独立していかないとするならば、産業資本家や商業資本家は、自分自身においてこれら貨幣の純技術的な諸操作をおこなわなければならない。この場合には、このために産業資本家や商業資本家は、追加資本を投下しなければならない。貨幣の純技術的な諸操作をおこなうための労働は「流通費であって、価値を創造する労働」（『資本論』第三巻、S. 347. 邦訳、同上四四九ページ）ではないのであるから、産業資本家や商業資本家は、このための追加資本を最小限にとどめようとする。だが、この労働は資本の回転上不可欠の労働である。

ところが、この貨幣の純技術的な諸操作を全資本家階級のために特殊な代理者が遂行することによって、これにもなう労働が短縮され、したがって、このための費用が縮小される。²⁴

(24) 「この労働（貨幣の純技術的な諸操作をおこなうための労働——引用者）は、特殊部類の代理者または資本家により残り

の全資本家階級のために遂行されることによって、短縮される」(『資本論』第三卷 S. 347、邦訳、同上四四九ページ)。

このような理由によつて特殊な貨幣取扱資本が産業資本より分離し独立するのである。²⁵⁾

(25) 「總資本の一定部分は、いまや分離して、貨幣資本——といっても、産業資本家および商業資本家の全階級のために右の操作を行うことだけをその資本的機能とする貨幣資本——の形態で自立化する。商品取扱資本のばあいと同様に、貨幣資本の姿態で流通過程に現存する産業資本の一部分が分離して、残りの資本全体のために再生産過程上の右の操作を行う。だからこの貨幣資本の運動は、またしても、自己の再生産過程中にある産業資本の自立化した一部分の運動に他ならない」(『資本論』第三卷、S. 346、邦訳、同上四四八ページ)。

貨幣取扱業者は、このように産業資本家や商業資本家が追加資本を投じて貨幣の純技術的な諸操作をおこなうのをかれらにかわつて資本を投じて右の諸操作を代行するのである。産業資本家や商業資本家は、このことによつて貨幣の純技術的な諸操作をおこなうための流通費を縮小することができ、貨幣取扱業者は、産業資本家や商業資本家よりその剰余価値の一部を手数料あるいは保管料の形態において入手して利潤を獲得するのである。

貨幣取扱業者は、だから一方では、より多くの貨幣を集積して貨幣の純技術的な諸操作におこなうことによつて利潤を増大させることができ、他方では、この貨幣の純技術的な諸操作をできるだけ合理化し、簡單化することによつて、すなわち、この労働のためについやされる費用をできるだけ縮小することによつて利潤を増大させることができる。だが、この両方とも限度のあるものであるから、貨幣取扱業者の利潤追求もまた限界のあることはあきらかである。

ところで、前述のごとく貨幣取扱業者は、貨幣の純技術的な諸操作を全資本家階級のために代行することによつて、産業資本家や商業資本家の購買手段および支払手段の準備金は、経済的必要の最小限に縮小され、かれの手もとに、とどまっている一定の蓄藏貨幣があり、他方、蓄藏貨幣の第二形態に属する資本の回轉上の種々の原因から形成され

る一時的に貨幣形態にある資本は、比較的長くかれの手もとにとどまっている。貨幣取扱業者は、このようにかれの手もとにとどまっている蓄蔵貨幣を、かれらの利潤追求のために利用し、利潤の増大をはかろうとする。

そして貨幣取扱業者たちの「利子生み資本または貨幣資本の管理」が「特殊的機能として」発展するのである。

いまや、貨幣取扱業者は、たんに貨幣の純技術的な諸操作をおこなうばかりでなく、「貨幣の借入と貸付」という特殊な業務をおこなう。そして貨幣取扱業は銀行業に発展する。

したがって、銀行は、一方では、金庫業者として産業資本家や商業資本家たちの購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣、貨幣形態で一時的に遊休している資本の形態にある蓄蔵貨幣、そしてまたあらゆる階級の貯金および一時不用の貨幣、さらには逐次消費されてゆく所得などを集積し、他方では、これらの集積された貨幣を自己の責任と計算にもとずいてその一部を利子生み資本に転化して貸出すのである。銀行への貨幣の集積は、一定の利子を銀行が支払うということによって促進される。銀行の利潤は、だから「一般的にいえば、貸すよりも安い利子で借りる」〔『資本論』第三卷、S. 439. 邦訳、同上五七二ページ〕ということによってもたらされるのである。

そこで、前述のごとく産業資本家や商業資本家のもとで形成された蓄蔵貨幣は、いまや銀行に集積されるわけである。

産業資本家や商業資本家の購買手段および支払手段の準備金としての蓄蔵貨幣は、前述のごとく銀行に集積されることによって経済的に必要な最小限に縮小される。貨幣取扱業の場合には、経済的に必要な最小限に縮小するための技術的手段を提供するにすぎないので、そのもとにたえずとどまっている貨幣は、蓄蔵貨幣の形態にあったのであるが、銀行は、この仮睡するはずの蓄蔵貨幣を利子生み資本に転化して貸出す。このようにして第一形態の蓄蔵貨幣

は、その一部分が銀行によって利子生み資本に転化され、利子生み資本として機能する。²⁶⁾

(26) 「銀行は産業資本家たちの金庫業者であるから、それぞれの生産者や商人が準備金として保有する貨幣資本、または支払金としてかれの手もとに流れてくる貨幣資本が、銀行の手に集積する。この準備金はかくして貸付可能な貨幣資本に転形する。かようにして、商業世界の準備金が——共同準備金として集積するがゆえに——必要な最小限に制限されるのであって、さもなければ準備金として仮睡するはずの貨幣資本の一部分が貸出され、利子生み資本として機能する」〔『資本論』第三卷、S. 439. 邦訳、同上五七二ページ〕。

つぎに、蓄藏貨幣の第二形態である貨幣形態で一時的に遊休している資本もまた銀行に集積する。この形態の蓄藏貨幣は、比較的長く滞留しているのだから、銀行は一定期間その払出の請求を受けずにそれを利子生み資本に転化する。²⁷⁾

(27) つぎの引用文は、蓄藏貨幣の第二形態に属する固定資本の減価銷却基金の積立について考察しているところの最後の文章であるが、マルクスはこうのべている。「大工業および資本制生産の発展に必然的に並行する信用業の発展につれて、この貨幣は蓄藏貨幣としてではなく資本として、とはいえその所有者の手ではなくその利用者たる他の資本家たちの手で、機能する」〔『資本論』第二卷、S. 177. 邦訳、同上三三四ページ〕。

このように、いまや、産業資本家や商業資本家たちのもとで形成された蓄藏貨幣は、その一部分が銀行によって利子生み資本に転化されるのである。

以上は、銀行に集中された産業資本家や商業資本家のもとで形成された蓄藏貨幣の一部分が、銀行において利子生み資本に転化されるということのみをみたのであるが、銀行が、その預金にたいして利子を支払うということによって、蓄藏貨幣を形成する産業資本家や商業資本家それぞれ自身においても、形成された蓄藏貨幣は、たんなる蓄藏貨幣としてはあらわれなくなる。すなわち、第二形態に属する蓄藏貨幣は、比較的長く滞留するのであるから、産業資本家や商

業資本家は、これを銀行に預金して利子をうることができる。だから、かれらは、この形態の蓄蔵貨幣をたんなる蓄蔵貨幣として銀行に保管を依頼するのではなく、利子をうるために預金する。かくして、この形態の蓄蔵貨幣は、それを形成した産業資本家や商業資本家自身によって利子生み資本に転化される。だが、この場合には、かれらは産業資本家や商業資本家という資格においてではなく、貨幣資本家としての資格において形成された蓄蔵貨幣を貨幣資本・利子生み資本として銀行に預金するのである。²⁸⁾

(28) 「この遊離貨幣資本(蓄蔵貨幣の形態にある——引用者)を利子を生むべく投じるさい、産業資本家、商業資本家は、産業資本家、商業資本家たる資格においてこれをなすのではない。というのは、遊離資本を貸付けることは産業資本、商業資本の運動自体ではないからである。これらの資本家はその資本を利子生み資本として投じることによって、そのかぎりにおいて、貨幣資本家、貸付資本家たる資格にたち、かかるものに転化する」(講座「信用理論体系」I「第一章」概説—信用理論の体系」三宅義夫教授「三七—八ページ」)。

「預金は、預金者にとつては貨幣資本である」(「資本論」第三卷、S. 555. 邦訳、同上七二〇ページ)。

ところで、銀行は、これらの蓄蔵貨幣ばかりでなく前述のごとき種々の貨幣を集積して、その一部分を利子生み資本として貸出すのであるが、預金は、長期契約のものでなければいつでも必要に応じて預金者によって払出されるものであるから、預金額はたえず動揺する。だから、銀行は、集積された預金の全額を利子生み資本に転化することは、けっしてできなく一定額の準備金をもっていなければならぬ。だが、一方では預金が払出され、他方では預金されてくるということがおこなわれるので、取引が平常的におこなわれている場合には、一般的な平均額は殆ど動揺しないで銀行にとどまっている。この額は、預金の量が大きければ大きいほど多い。この部分は、貸出すことができる。かくして、銀行は、一定の預金の払出のための準備金を残して他の部分を利子生み資本として貸出す。したがって、

蓄藏貨幣の形態にある貨幣は、この銀行の準備金という形態のもとに最小限に縮小されることになる。蓄藏貨幣の形態でとどまっているのは、銀行の準備金の形態においてだけとなる。この銀行の準備金は、産業資本家や商業資本家にとつての購買手段および支払手段の準備金、また世界貨幣の準備金であり、銀行にとつての預金払出のための準備金であり、発券銀行であれば銀行券の兌換のための準備金であるというように種々の準備金としての機能が、この銀行の準備金に集約されている。

産業資本家や商業資本家のもとで資本の回転上形成される資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣は、その一部分を産業資本家や商業資本家自身の貨幣資本たる資格において利子生み資本として銀行に預金され、他の一部分を購買手段および支払手段の準備金として銀行に預金される。銀行は、これらの蓄藏貨幣を他の源泉から集中してくる貨幣とともに一定の準備金を残して貸出す。このようにして、産業資本家や商業資本家の私的な貨幣蓄藏は、名目的なものとなり、現実には積立てているものは、ただ貨幣請求権にすぎないものとなるのである。

したがって、現実には蓄藏貨幣の形態にとどまり、蓄藏貨幣としての諸機能を果たしているものは、銀行の準備金であるということになる。

マルクスは銀行の準備金が、資本制生産の発展した諸国では、平均的にはつねに、蓄藏貨幣として現存している貨幣の大きさを表現するものであるとつぎのごとくのべている。

「銀行の準備金は、資本制生産の発展した諸国では、平均的にはつねに、蓄藏貨幣として現存する貨幣の大きさを表現するのであって、この蓄藏貨幣の一部分は、それ自身ふたたび、自己価値ではない証券——金の単なる支払指図書——から成りたつ」(『資本論』第三卷、S. 513. 邦訳、同上六六五—六六六ページ)。

ここで「この蓄蔵貨幣の一部分は、それ自身ふたたび、自己価値ではない証券——金の単なる支払指図書——から成りたつ」とあるのを蓄蔵貨幣の究明においてどのように解するかという問題がある。この問題は、蓄蔵貨幣の機能が、代理者によつてはたすことができるかどうか、という問題、さらに現在のごとく国内的流通において不換銀行券が一般的流通手段として機能している場合に、この不換銀行券が、蓄蔵貨幣の機能を代理することができるかどうか、という問題と関連して考察すべきであると考えられる。これらの問題について今後の研究をすすめていこうと思う。